



二度の転機から現在のイチゴの直販・狩り園経営を確立し、消費者に満足度の高いイチゴを供給している、東郷町の近藤守信さんをご紹介します。

研修生時代に農業に対する考え方と姿勢を学ぶ

近藤さんは、猿投農林高校を卒業後、静岡県において施設園芸を先進的に行っていた武藤寛さんの元で研修をしました。昭和45年当時、施設園芸はまだ初期の段階で、竹に油紙で被覆するのが一般的な時代でしたが、武藤さんは国の補助事業などを利用して新しい施設を次々と建設していたそうです。控えめな人柄で、こちらから質問しないと教えてくれませんでした。農業に対する考え方は先進的かつ前向きで、地域からの信頼も厚く、近藤さんのその先の農業経営において道しるべとなる人物でした。



近藤守信さん

トマト栽培を開始、しかし最初の大きな転機へ

研修ののち、父親の稲作・果樹経営は継がず、トマト栽培を開始しました。東郷町の丘を切り開いてできたその土地は粘土質で、土づくりに大変苦労しましたが、武藤さんからの「自分の地域の気候や土に合った栽培方法となるよう工夫なさい」という教えを守り、必死に土づくりを行いました。栽培技術も磨いて順調に栽培できるようになり、結婚や奥さんの出産などを経ながら、10年間ぐらいはトマトで生計を立てることができました。しかし、同一施設で同一作目を10年以上作り続けているうちに、土壤病害に悩まされるようになりました。化学農薬を使用した土壤消毒等によりなんとか栽培を続けていましたが、奥さんが三人目を身ごもっていた昭和62年に、ついにトマトをやめて、イチゴへと作目転換することを決めました。イチゴを選んだのは、「イチゴは子供から大人まで皆に好まれる品目で、トマトより化学農薬の低減に取り組みやすかったから」という理由とのことですが、三人目の出産を前に自分の働きに生活がかかっており、奥さんにもほとんど相談できないままの決断でした。

イチゴの直売を確立

イチゴ栽培においても、自分の栽培スタイルを確立するのに5年ぐらかかりました。また、当初は個人で市場出荷したのですが、農薬や化学肥料を減らした努力が価格に反映されません。そのような中、販売方法の一つとして消費者グループへの配達販売を始めました。消費者から直接「おいしい」という声を聞くにつれ、市場向けではなく、消費者に直接喜んでもらえる、完熟

の美味しいイチゴ作りをさらに目指すようになりました。そこで、馴染みの消費者からの求めに応じて作業所の一角で直売を始め、地道な販売活動と消費者ニーズに合ったイチゴ生産により、平成8年頃には全量直売で販売できるようになりました。



現在の直売所

第二の転機、作業所が火事に

全量直売により経営が軌道に乗ってきた頃、作業所が火事になるという事件が起きます。作業所には、買ったばかりの農機具のほか、住居を改装中だったため家具等も保管しており、それらがすべて焼失。さらには、隣接するハウスも熱で溶け、建て直さなければ使えない状況に陥りました。このとき近藤さんは45歳。農業を続けるか否かの判断を迫られました。再チャレンジすることに決めます。その理由は、以前からのお客さんがこまめに買ってくれたこと、その縁から大口の注文も入ったこと、また息子さんが農業大学校に進学してくれたことでした。

イチゴ経営を続けることを決めた近藤さんは次の一手として、イチゴ狩り園を始めます。直売所を訪れる消費者の「作っているところを見たい」という要望を受けて始めましたが、近藤さん自身も「収穫する楽しみも体験してもらいたい」と思うようになりました。

研修生の受け入れや地域のイチゴ生産振興

平成10年ごろから現在に至るまで毎年、農業大学校や東京農業大学の学生など、住み込みの研修生を受け入れています。技術面の指導では、本人に工夫して取り組ませるため、ポイントのみを説明し、武藤さんと同じように、質問してきたら教えているそうです。技術以上に、農業は自分の実力で成果が出る、やりがいのある職業であることを伝えるようにしています。

また、平成27年に設立されたJAあいち尾東いちご部会で部会長を務めています。以前から地域のイチゴ農家とともに勉強会などは行っていましたが、部会では各々がさらに切磋琢磨することを目的とし、近藤さんは、やる気のある若手に惜しみなく技術や経験を伝えているそうです。

夢は地域の憩いの場、「癒し」も提供したい

現在、狩り園は息子さんが切り盛りしています。狩り園経営では、お客さんに存分に楽しんでもらうため、イチゴの状況を考慮して入場を断ることもあるそうです。形は悪くても大きくて美味しい、満足度の高いイチゴを生産するように心がけているとのことでした。今年新たに建てられたばかりのイチゴ狩り用の施設では、苗が元気に育っていました。名古屋市近郊の狩り園として、さらなる発展が期待されます。



イチゴ狩り用新施設

近藤さんの夢は、施設の周りに桜やクリの木を植えて、直売や狩り園に来た人たちに景色も楽しんでもらう地域の憩いの場を作ることだそうです。「農業には、「食」を生産するだけでなく、「癒し」を提供する役割もある」と話す近藤さん。今年はずでにクリの木を100本植えており、さらに増やしていきたいと楽しそうに語ってくれました。

執筆：農業経営課

取材協力：尾張農林水産事務所農業改良普及課